

コンピュータが笑ったなら

株式会社オージス総研 取締役社長 国重 茂幸



コンピュータ・ソフト開発に全く縁のなかった私が、この業界に身を置いてから早3年になる。

大フロアーに数百のパソコンが並び、若い男女が思い思いの姿勢で、白い箱の中の黒いディスプレイを見詰めている。キーボードに時々手をやる人、慌ただしく叩く人、言葉を交わす人はほとんどいない。隅の方では何かミーティングが開かれているようだが、とても小さな声でひそひそ話のようである。カチカチととぎれもなく続くプリンタの音が一種の救いにさえなっている。

これが私とソフトウェア生産現場の最初の出会であった。私が画いていたソフト開発の仕事とはあまりにも違うこの風景に、ある種の恐ろしさを感じるとともに、どのように声をかけ、どんな挨拶をすればよいのか、全く言葉を失ってしまった当時は今もはっきりと憶えています。

こんなこともありました。夜半11時頃、灯の消えているビル、フロアーの一隅で小さなライトがパソコンを照らしている。長い髪の女性が向かい合っている、静まりかえった夜であった。事務所を巡回していた私は「遅うまでご苦労さん、早よう帰りや」彼女は振り返り、疲れた顔にわずかな笑みを浮かべて「はい」とも「ええ」とも聞こえる小さな声で応えた。この光景を私は友人に少々オーバーに、「魍魎魍魎の世界だなあ」と語り、「システム開発は、かつてのコンピュータが高額であったため、夜中に使ったもの。今も夜遅くまで仕事をしている人は沢山いる。それをそのように言っただけ」とたしなめられた。

どちらかと言えば、賑やかに、わいわい言いながら仕事を進めてきた私にとって、ソフトウェアプロダクツは何か孤独で寂しさが漂う。1年の大

半を米国シリコンバレーで研究しているわが社のスーパーシステムエンジニアの1人は、夜は演歌で刻を過ごす。美空ひばりや北島三郎のテープを持って飛行機に乗り込んだ姿と重ね合せた時、この仕事の持つ厳しさと一種の悲壮感に何か息苦しく、胸が痛む思いがする。

私は、もともとおもしろい方だと思っている。そう、面白く愉快地に仕事を進めたいと40年間サラリマンを続けてきた。

今もその気持ちは変わらない。

「同じやるなら愉快地にやろう」私の大阪ガス時代、当時の大西社長からよく聞かされた言葉である。厳しい場面におかれたり、難しい課題に取り組んでいる時、同じやるなら義務感でやるのではなく、その状況を楽しみに変えて、明るく活き活きとやろうではないか、という意味である。

人事部長就任時、さっそくこの言葉を頂戴して人事部内に「ユーモア倶楽部」を誕生させた。活動の手始めに、人事担当専務以下七十有余名の“人事部ユーモア人名鑑”をつくり発行しました。そのいささつや活動を或る雑誌に投稿し、いささかの反響を呼んだことがありました。

さて、今の私にとっての願い、それはシステムやパッケージを笑いの中で、楽しんで作りたということです。もし、コンピュータがユーモアを解し、ジョークをしゃべったらどんなにおもしろい職場になることだろうか。もし、コンピュータが私たちに明るい笑いを与え、みずからもおかしみを敏感に感じとって笑えたら、あの白い箱に、黒いノートにいいしれぬ人間味を感じ、友人にな

れるのだが、そしてわが社1000人の社員はもっともって愉快に仕事ができるにちがいません。

まず、行動の第1歩として、私の机の上に1冊の本を置きました。私の机はパソコンが1台、黒い書類箱1つ、社内用電話帳1冊、それにカバーを掛けた本、社員がやってきて「社長、何を讀んでほりますの」、その本に手をやります。ここは少し難しい顔をして「少し勉強をしているんや」、彼は本を開き「ええっ、こんなのあるんですか。」本のタイトルは“サルでもわかるパソコン入門”、あの反省猿と同じようなサルがスーツにネクタイ姿で真面目な顔をしてパソコンを見詰めキーボードに手をやっています。後から若い男女の社員がこれも真面目に、が、しかし少し笑いを押さえながらのぞき込んでいる写真が1頁目です。

まずは笑い出すこと必定。

お断りしておきますが、この本、至ってよくできた本です。おサルさんの漫画入りで楽しく読ませてくれます。

あとがきの一部をご紹介しますと、“今まではパソコン入門書がどうも総花的でおもしろくない、と感じていたその不満が、この本になりました。実際に製作してみると「サルにもわかる」は「北京原人にもわかる」くらいに難しくなってしまったかな、という反省がありますが、この本をじっくり読んでいただければ、パソコン入門の入り口をクリアすることができるのではないかと思います。”“第5章、サルも楽ちん、ロータス1-2-3”等は私にとっては、やや難解、どうも私はサルと北京原人の間のようです。一読をお薦めいたします。

第2段の何かおもしろいことを考えねばと思っていましたら、友人が新聞の切り抜きを持ってきてくれました。“パソコンで巧みに感情表現、フェイスマーク増殖中”。ワープロやパソコンなどを使って作られた文書は味けなさを感じる。自筆と違い活字だと書き手の感情が文書から読みとりにく

い。こうした欠点を補うため生まれたのがフェイスマークです。(。.) (。.) は笑顔、(。;) は照れ笑い、右顔のセミコロンは冷や汗、m(。)_m はごめんなさいと三つ指ついて頭を下げているところを正面から見た図、等々もう200~300種類も使われているそうです。またフェイスマークを集めた本が出版され、フェイスマークを胸にデザインしたTシャツも売り出されているのが写真入りの記事となっています。しかも、うれしいことには、このフェイスマークは米国が原産だそうですが、今や日本産のほうが表現力豊かで、その数も圧倒的に多くなってきているようです。誰が考え出したのか楽しいコンピュータになってきました。そうです、コンピュータもやっと笑い出してきたようですネ。

コンピュータが笑ったなら、とは詰まるところ私たち1人ひとりが笑いながら仕事ができたら、特に、システム開発という孤独で、とても気難しい仕事であればこそ、そこに笑いが必要であり、笑いを通じて人としての暖かい連帯感が生まれてくるのではないのでしょうか。

もし、笑いがなければいくら計算が早くても、いくら素晴らしい情報を生み出しても、高度情報社会と叫んでも、しょせん、乾ききった潤いのない明日でしかないのではないのでしょうか。

追記

『サルにもわかるパソコン入門
—人類を救うパソコンへの道—』

発行人 須田 旬

発行所 ジャパン・ミックス(株)